これからの猪猟〈20回〉

田宮　治

三頭三様の噛み止め芸

そして、いつでも撃てるように銃を突き出し、用心して左側を見た瞬間、わが目を疑う恐ろしい光景が飛び込んできた。何と犬たちは三方を崖で囲まれた滝壺に猪を追い詰め、噛み止めていたのだ。

武蔵号とブイ号は、猪の頭にかぶり付き、カツ号も二頭の中に割って入って噛みまくる大激戦の真っ最中である。猪は体ごとすっぽりと滝壺にはめ込まれて動けなくなっているが、恐ろしい形相でグォッグォッと牙を剥き出し、犬たちに噛み付いている。

私は咄嗟に犬たちのすぐ後ろに立って、銃を思い切り突き出し、猪にかぶり付いている犬たちの頭を交わして、三〇センチくらいの付け撃ちで猪の首筋と背中の間に一発を撃ち込んだ。

ズドーンと滝壺を揺がす轟音が一発。当然、猪はその場に崩れ落ちて動かなくなった。「よし、決まりだ。よくやった、よくやった」と一頭ずつ名前を呼び、「よしよし」と褒めちぎり、そのまま犬たちのやりたい放題にさせておいた。犬たちは今までのうっぷんを晴らすかように噛みまくっている。私はその勇姿を見ながら、ほっと安堵し、この一戦の凄さを改めて痛感していた。

「お前たち、凄い猪犬になったなあ。こんな熾烈を極めた戦いはなかなかできるものではない」と、われながら愛犬たちの猪止め芸の高さに感服していた。

猪を滝壺から引き出そうと前足を持って引っ張るがびくともしない。よく見ると、猪は体の半分を滝壺にどっぷりと浸かり、足の付け根まで見えない状態になっていた。撃ち獲った猪は小物だと思ったが大間違いだった。私は腰の引き綱（犬たち用）を三本繋ぎにして、水の中に両手を入れ、猪の前足の付け根から背中に回して縛った。その綱を肩にかけて、滝壺から力いっぱい引き出した。

犬たちは猪にまだ噛み付こうとしている。「よしよし、もういいよ。それよりこれを食べな」と、いつものご褒美のコッペパンを半分ずつ差し出したが、三頭とも疲れきっていたのか食べようとしない。

武蔵号は小川の中に腹這いになって動かない。滝壺で一時間以上も噛み付き合っていたので、さすがの武蔵号も背中を噛まれて大ケガだった。

ちなみに、これくらいの大猪を犬たちが噛み止めるとしたら、常識的に考えれば、猪のほうが強いに決まっている。だから、そんな強い大猪を犬たちが噛み倒すのは至難の技なのである。

特に今回のような猛猪との対戦になると、当然、犬たちは百戦錬磨の強烈な噛み止め芸を身上とする三頭（できれば猪の体重と犬たちの体重が同じになるくらいが理想）でないと太刀打ちできない。

それくらいの猟芸を見極めた上での組犬で対戦することが大事である。そうすれば、三頭が三様の噛み止め芸を発揮して、どんな激戦でも無傷で完勝できる。

猪の頭に一気に噛み込むブイ号、カツ号、武蔵号の三頭なら、猛猪でも必ず二頭が猪の頭に攻撃して、もう一頭が猪の後ろに回り込み、猪の弱点である両足と尻に強烈な噛みを連発するのである。

このように、三頭が独自の持ち

味の噛み止め芸で長時間戦えることができれば大ケガもしない。

その証明となるのが、今日の一戦で見せた第一猪止め現場と第二猪止め現場の対戦である。この第一、第二猪止め現場とも実に素晴らしい猪止め戦術であり、犬たちの攻め鳴きを聞いただけで、対戦状況や猪止め芸の凄さが十分に理解できるものだった。

犬たちの見事な連係で、三方から猪を攻め立てて三頭が三様の噛み止め芸を発揮し、完璧な攻め込みで猪を止めていた。

武蔵号は水中の猪の前足の付け根に噛もうと突っ込み、背中を負傷するも、ついにこのとおり噛みまくっていた

一人だけの時には、こんな小川の水流があれば猪の引き出しは楽である。

本来なら、この二つの猪止め現場が勝負の決めどころであり、万難を排して一秒でも早く寄り付いて、猪をその場で撃ち獲るのが猪猟の大道である。しかし、この完勝の定石を覆す私の無謀な策略によって、第三猪止め現場の状況はがらりと変わったのである。

犬たちは猪を見事に追い詰め、これ以上逃げられないどん詰まりの滝壺にはめ込んだ。この状態になると、猪は体ごとすっぽりと滝壺にはまっているので逃げることができない。

ただし、犬たちも猪の弱点の両手足や尻への攻撃はなかなかできず、おまけに滝壺の間口が狭いので、二頭の犬が並び攻めるのがやっとである。三頭で攻め立てれば猪の反撃を交わせなくなる。つまり、一㍍くらいの狭い滝壺の前で押し合いへし合いを繰り返し、私が来るのを待っていたのである。

猪は弱点の足や尻を滝壺に守られ、長時間にわたって硬くて強い毛皮で覆われた頭だけを突き出して反撃してきたので、犬たちは真正面から噛み付く以外になかった。この噛み合いで、犬たちは素早く猪の頭や首筋に噛み付いていたのである。

そんな中で、武蔵号は得意としている猪の足や尻を噛みに行くために、水中から出ている前足の付根を噛み付こうと潜り込んだ時、背中を噛まれたのだった。

以上が今日の流れであり、大一番の総括である。

私は犬たちに「よしよし、よくやった」と言って、小川の上に張り出した木の枝に繋いだ。そして、引き出した猪の腹を割り、小川に水漬けしながら、今日のことを振り返り反省していた。

犬たちは私の指示どおりに終始最高の闘いをしてくれて、文句なしの完勝だった。自ら招いた失敗だったのに、これほど見事に戦い続けてこの私を待ち侘びていた。この愛犬たちをしっかり守って、無事に完勝してやれなかったことが残念で悔しく、ただただ武蔵号に詫びるほかなかった。

せめてあと十五分くらい早くこの激戦の場に私が駆けつけていれば、武蔵号は焦らずいつもどおり

攻撃していたものを。そう思うと不憫で残念で仕方ない。「ごめんな武蔵。必ず治してやるからな」と、丁寧に傷口を水洗いして、全身の泥を取り除いてやった。

ただ、今日は肝心の薬も包帯も持っていない。単独猟ではいかなる場合であっても、持ち合わせの物をもって難事を切り抜けるのが原則である。一本しかないタオルで傷口を覆い、栄養ドリンクを三回に分けて飲ませてやった。この栄養ドリンクは犬たちが大ケガで動けなくなった時など、クロマイ薬と併せて飲ませてやると実によく効く即効薬になる。

「さあ、頑張れ！　この水を飲めば車まで大丈夫だ。車に戻れば何だってあるから、しっかり手当てしてやるからな」と話しかけながら、ボトルの水をたっぷり飲ませてやった。猪の引き出しは明日一日がかりでやることにして、早めの帰り支度となる。

車まで戻る道程は、小川を五〇〇メートルくらい下った所に田んぼがあり、その奥にキャンプ場から下りている小峰がある。その小峰を三十分くらい登るコースである。

「さあ、来い」とカツ号とブイ号は綱なしで、武蔵号には銃袋をタスキ掛けにして抱き、小川伝いに田んぼの小道に出た。

ブイ号とカツ号はまだまだ元気で、猪をまた狩り出そうと山入りを狙っているが、「もういいぞ。行くな！」と呼び止め、小休止をとりながら小峰を登った。

武蔵号もドリンクの効き目が出たようで、「放せよ」ともがいている。不安な気持ちで放してやると、元気に私の前を歩いている。大丈夫かな？と思いながらも、ここから小峰を登ることを考えれば大助かりなので、「よしよし、武蔵来い」と呼びながら小峰を登り始めた。

武蔵号は私に遅れることもなく何事もなかったようについて来る。やっと安堵して小峰を登り続け、ジープを止めている所に帰還したのである。

その後、武蔵号の手当てはいつもどおりに完璧にしてやり、ルンルン気分で今日の宿泊先の加茂城に向かった。

（つづく）

矢先の安全確認の徹底を！

昨年末の30日に熊本県内の山中でシシ猟をしていた男性ハンターが、十数メートル先で正月飾りを採集をしていた男性の腹部に猟銃の弾が当たり重傷を負わせた。撃った男性ハンターは「イノシシと間違えて撃った」とニュースでは伝えている。

毎年こうした痛ましい事故が繰り返し発生しており、そのほとんどが矢先の安全確認を怠ったものが多い。

今猟期も残すところあとわずかとなってきており、さらに一層気を引き締めて安全狩猟に心掛けてもらいたい。